1992年6月5日第三種郵便物認可　（毎月1回25日発行）　2010年12月29日発行　KTK増刊通巻3570号

フォーラム関連新聞記事より

← 平成二十二年十一月二十八日（日）　京都新聞記事

「びわこダルク」設立8周年
太鼓演奏やフォーラム

びわこダルク設立8周年を祝って、和太鼓を演奏する富山ダルクのメンバー（大津市生涯学習センター）

薬物依存症からの回復を支援する民間施設「びわこダルク」（大津市丸の内町）の設立8周年フォーラムが27日、大津市本丸町の市生涯学習センターで開かれた。依存症の経験者が自らの体験を語り、薬物の脱却へ連帯を呼びかけた。

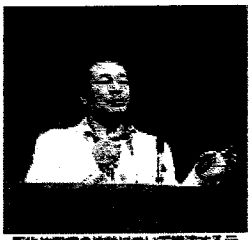
「びわこダルク」は寮生活も含め約20人が社会リハビリに取り組んでいる。全国に同様のダルク組織が46カ所ある。

沖縄ダルクに入所経験のある元ボクサー川崎竜希さん（38）が講演し、「幻覚によって人を殺そうと考えたこともある」と薬物の恐ろしさを訴えた。

「家族のため、今日一日は薬を使わない、との思いを積み重ねてきた。生き残れて本当によかった」と語った。

また、びわこダルクの利用者6人が、回復への取り組みなどを語った。他地域のダルクメンバーによる太鼓演奏などもあり、フォーラムを盛り上げた。（山下恭一）

薬物依存 克服を
フォーラムに経験者ら参加



薬物依存症の体験について講演する元プロボクサーの川崎タツキさん＝大津市本丸町の市生涯学習センター

薬物などの依存症で苦しむ人々を励ましあうと、依存症経験者が過去の体験を告白するフォーラム「回復の芽～成長の花へ」が27日、大津市本丸町の市生涯学習センターで開かれた。薬物やアルコールの依存症に苦しんだ元プロボクサーの川崎タツキさん（38）らが講演し、県内外から依存症経験者やその家族ら約400人が参加した。

薬物やアルコールの依存症からの復帰を支援するNPO法人「びわこダルク」（大津市丸の内町）が創立8周年を機に開催。

会場では、依存症経験者が薬物に手を染めたきっかけや、回復までの体験などについて発表。薬物依存症を乗り越え、ボクシングの東洋太平洋スーパーウエルター級で1位に上り詰めた川崎さんは「仲間や家族の支えで立ち直ることができた」と振り返り、「自分の命を大切にして」と訴えた。

息子が薬物依存症だという和歌山県新宮市の女性（71）は「同じ悩みを持つ『仲間』と話し合える場は貴重。依存症と戦う人やそれを支える家族の話を聞いて、勇気に満ちあふれた」と語っていた。

平成22年11月28日（日）
産経新聞記事

↓　平成22年12月7日（火）毎日新聞記事

現場から　記者リポート

薬物依存症
仲間と一緒に克服
自助組織「びわこダルク」
グループセラピー、軸に
合法の薬乱用、苦しむ人も

回復の芽～成長の花へ

びわこダルク8周年フォーラムでパンを運搬する入所者たち＝大津市本丸町の市生涯学習センターで

薬物依存症患者の自助組織「びわこダルク」（大津市丸の内町）が9月、同設立から8年を迎えた。これまで延べ約300人の入所者を受け入れ、厳しい規律の中で共同生活を送りながら回復プログラムに取り組んでいる。「薬物を絶ったあとも、仲間がいるからやめられる」と話す人が増えている。一方で、職場や企業の理解や協力が不足しているという。ダルクを訪ね、薬物依存症からの回復の道のりを聞いた。

【村瀬優子】

住宅街に建ったレンガ造りの建物。「びわこダルク」（大津市丸の内町）が9月、同設立から8年を迎えた。これまで延べ約300人の入所者を受け入れ、厳しい規律の中で共同生活を送りながら回復プログラムに取り組んでいる。「仲間がいるからやめられる」と話す人が増えている。一方で、職場や企業の理解や協力が不足しているという。ダルクを訪ね、薬物依存症からの回復の道のりを聞いた。

【村瀬優子】

←平成22年11月28日（金）読売新聞記事

薬物依存に負けない
びわこダルク 患者家族らが体験談

薬物依存症からの回復を支援する施設「びわこダルク」（大津市丸の内町）は、同市本丸町の大津市障害学習センターで、設立8周年のフォーラムを開き、依存症の人や家族ら約350人が、体験談などに聞き入った。

ダルクは依存症患者が共同生活を送りながら、社会復帰を目指すリハビリ施設。びわこダルクは2002年11月に設立された。定員は入寮者15人、通所者5人で、8年間で延べ200人以上が利用した。

フォーラムでは、6人が経験を発表。薬物の影響で睡眠が開き、我が子の顔をまともに見られなかったという男性は「ダルクの仲間の力も借りて薬物を断ち、自分を軽蔑し続ける状態から抜け出せた。社会に出て、毎日を大切に生きていきたい」などと語った。

また、患者の家族らで作る「びわこ家族会」会員の女性は、息子が睡眠薬を多量に飲んで依存症になった体験を告白。治療について相談できる人が身近におらず家族で苦しんだが、ダルクや家族会の援助で回復した経緯を涙ながらに話すと、会場から大きな拍手が送られた。

猪瀬健夫・同施設長（46）は「仲間の力も借りて回復を目指すダルクは、社会への橋渡し役。『依存症は病気』と理解してもらい、立ち直ったメンバーを受け入れてもらうためにも、地域に根ざした活動を続けたい」と話した。

↓　平成22年11月28日（日）毎日新聞記事

びわこダルク
結成8周年

薬物依存症～どう脱却
元プロボクサーら体験談

薬物依存症の体験談を話す川崎タツキさん

東京都の元プロボクサー、川崎タツキさん（38）が「生きてよかった！」と熱し講演。20代で覚せい剤を使用し、妄想に取りつかれて人を刺そうとしたことを紹介。沖縄の施設で治療後ボクサーとなり、結婚して2歳の娘も授かった川崎さんは「毎日楽しく生きられることに感謝している」。回復プログラムに参加し、今月、大津市の印刷会社で社員になったタケさん（26）は「薬をやめようとしている仲間のおかげでやめられた」と語った。

【村瀬優子】

自助組織「びわこダルク」（大津市丸の内町）が9月、大津市内で8周年フォーラムを開き、当事者や家族らが体験談を語った。